

大倉洋甫先生を偲んで

長崎大学大学院医歯薬学総合研究科教授 黒田直敬

2015年2月12日に大倉洋甫先生(九州大学名誉教授)が、84歳で永眠されました。突然の悲報に門下生一同大きな悲しみに包まれましたが、ここに、大倉先生のご生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

大倉先生は1953年に九州大学医学部薬学科をご卒業後、同大学院薬学研究科博士課程を修了され、九州大学医学部助手、薬学部助手、助教授を経て、1972年に薬学部薬品分析化学講座の教授に昇進されました。その後、ご退官(1994年)までの37年余に渡り、日本の分析化学、特に薬学領域での生体試料分析分野の牽引役を果たしてこられました。

先生は、一貫して、薬学に必要な微量生理活性物質の高感度分析に関する研究に携わってこられました。生体内に存在する微量の生理活性物質を鋭敏に検出できるルミネセンス(蛍光、りん光、化学発光)に早くから着目され、また、有機化学反応を巧みに利用し、対象分子と複数箇所では反応して蛍光性分子に変わるような独創的な試薬や方法論の開発を数多く手掛けられました。さらに、先生のご関心は高速液体クロマトグラフィーやフローインジェクション分析など当時の最新分析技術にも及び、生体の機能解析や病態の臨床化学的研究等などにも活用できる化学計測法などの独創的な開発研究を数多く

行ってこられました。1985年には、これらの研究業績により、日本分析化学会学会賞を受賞されています。

大倉先生が主催されていた薬品分析化学講座に私が配属されたのは、1980年のことで、当時は大倉先生のもと、小橋一彌助教授、財津 潔助手及び山口政俊助手が研究と教育、指導に励んでおられました。大倉先生の印象は、いつもダンディーで、研究に関しては常に先見の明をもって物事を進められ、冗談好きの先生でもありました。当時の研究室では、先生がセミナー等で発せられる示唆的な一言が闊達な議論へと展開し、大きな研究成果に結びつくことも度々でした。また、教室には自由な雰囲気と共に、文武両道という気運もあり、研究はもとより、研究室をあげてのテニスが盛んで、薬学部的一大イベントであるテニス大会におきましても、常に教室は優勝候補の一角を占めておりました。私が配属された頃には、大倉先生ご自身がテニスをされることはめったにありませんでしたが、研究室の窓からテニス大会ではよく応援して下さいました。一方、研究にしましては、思ったことを大変自由に遂行させていただきまして、おかげさまで、研究を自分で企画・実行し、失敗することの悔しさ、成功することの楽しさを早くから味わうことができ、これがその後の私の人生を方向付けるきっかけともなりました。

今、改めて、先生のご指導に感謝いたしますとともに、生前のご偉業とご功績を偲び、謹んでご冥福をお祈り申し上げます。